



教皇様の聲


5

253号

Libreria Editrice Vaticana, Citta
del Vaticanoの転載許可済 2001


希望の母マリア

〔水曜日の一般謁見でのお話。〕

 今日のこの集いは、ヨハネの黙示録の有名な箇所によって始まりました。子供を持つこの女性の中には、教会の典礼と美術においても、伝統的にキリストの母、マリアの姿が映し出されてきました。黙示録に現れるこの女性は子供を出産するところであり、同時に血のように赤い竜がその女性と生まれようとする子供に対して猛威を振るおうとしています。しかしながら、福音史家の最初の意図によると、子供の誕生が救い主の到来を示すなら、その女性は神の民、また聖書のイスラエルと教会を擬人化するものということになります。しかしその女性をマリアと解釈しても、福音史家のこの最初の意図と矛盾することにはなりません。マリアは「教会の模範」だからです。（「教会憲章」63、聖アンブロジオ「ルカの福音注解」II,7参照）

救い主の母の横顔は、信仰深い共同体を背景にしてこのように眺めることができます。悪魔と悪を想起させる竜は、マリアと教会に対して立ち上がるもので、旧約聖書の象徴的表現によって示されています。赤は戦い、虐殺、流血の印で、冠をかぶった「七つの頭」は強力な力を意味しており、「十本の角」は、預言者ダニエルが描く猛獣の大変な強さを思い起こさせるものです。（ダニエル7・7参照）これは歴史の中で猛威をふるう不正な権力のイメージでもあります。

人間の自由と解放を完全に示しているマリア


 善と悪はこのようにぶつかり合います。マリアや御子、教会は外見的には弱く、わずかな愛と真理、正義しか示していないように思えます。マリア、御子、教会に対して、残忍でひどい暴力、偽り、不正義の勢力が解き放たれます。しかし、黙示録のこの場面を終わらせる歌が思い起こさせるのは、最後の決断が「我々の神の救いと力と支配、神のメシアの権威」（黙示録12・10）に委ねられているということです。

（・・・）そして、黙示録が強調するように（12・6、14参照）、その女性が避難所にとどまるのは、ほんの限られた間だけです。苦悩、迫害、試みの時間


には終わりがあります。最後には解放と栄光の時がやって来るのです。

この女性をマリアと解釈しながらこの神秘を黙想すると、次のように言うことができるでしょう。

「御子のそばにいるマリアには、最も完全な自由のイメージがあり、人間と宇宙の解放が示されています。教会が眺めるべきなのは、母として模範としてのマリアですが、そうすることでマリアの使命の意味を完全に理解する」ことができるからです。（教理省「解放の神学について」1986年3月22日、97番、「救い主の母」37番参照）

 マリアを見つめましょう。マリアは歴史の荒野を旅する教会の像であり、天国のエルサレムである栄光の目的地へ向かう道です。天国でマリアは子羊である主キリストの花嫁として光輝いています。神の母は、東方教会が祝っているように、「道を示す」方です。道とはすなわちキリストのことであり、キリストこそ御父に完全に会うための唯一の仲介者です。フランスの詩人はマリアを次のように見えています。「最初の栄誉と最後の開花における被造物、最初の輝きである夜明けに神から現れた方。」（P.クローデル「正午のおとめ」p.540）

無原罪の御宿りにおいて、マリアは被造物である人間の完全な模範です。マリアは最初の瞬間から、被造物を神化し支える神の恩恵に満ちあふれ（ルカ1・28参照）、常に自由に神の道をお選びになります。一方、栄光の被昇天におけるマリアは、復活したキリストに呼ばれる被造物の像です。キリストは、被造物が歴史の終わりに完全に神と一致し、復活して永遠の至福にあずかるようお招きになるのです。歴史の重みと悪の攻撃を感じている教会にとって、キリストの母は栄光と保護に包まれ救われた人間の輝かしい象徴です。

 「神がすべてにおいてすべてとなる」（1コリント15・28）時、私たちは人間の生命の究極的なゴールにたどり着きます。また、「もはや海もなくなった」（黙示録21・1）と黙示録が預言しているように、破壊的な混沌や悪は最後には滅ぼされるので

す。そして教会が「夫のために着飾った花嫁」（黙示録21・2）としてキリストに示されます。それは、親密で汚れのない愛の瞬間です。しかし今、教会は、まさにその天に昇るおとめを眺めながら、世の終わりに完全に手に入れる喜びの前味をすでに味わっています。マリアは信仰の旅路において教会とともにいます。マリアは歴史を通して「信仰、愛、キリストとの一致における教会的交わりの模範です。永遠にキリストの神秘に現れるマリアは、使徒たちの中におられ、教会誕生のまさに中心に、教会のあらゆる世代の真ん中にいらっしゃいます。確かに教会は、イエスの母マリアや兄弟たちとともに高間に集められました。ですから、主の兄弟とともにいる神の母マリアなしには、教会について語ることは出来ないのです。」（教理省「交わりについて」1992年3月28日、19番、アキレイアのクロマツィウス「説教」30,1）

マリアの心は汚れなくあらゆる徳にあふれている



マリアへの賛歌を歌いましょう。マリアは、救われた人間の像、信仰と愛に生きる教会のしるしであり、天国のエルサレムの完成に前もってあずからせてくださる方です。「『聖霊の堅琴』と呼ばれたシリアの聖エフレムは、その詩才を発揮してマリアをたたえ、シリア教会の伝承全体に今も衰えざる影響を及ぼしています。」（「救い主の母」31）マリアを美の像（イコン）として描くのもシリアの聖エフレムです。「マリアは体において聖であり、霊においては美しい。思考においては純粹で、理解においては誠実、情緒においては完全で、意向においては慎みと堅固さを備え、心は汚れなく、あらゆる傑出した徳を備えている。」（「おとめマリアへの賛歌」1,4）このイメージが、キリストを完全に映し出し、神の民の間から現れる印として、「山の上にある町」「すべてのものを照らすよう燭台の上に置かれたともし火」のように全教会共同体の中心に明るく輝きますように。（マタイ5・14～15参照）

(2001.3.14)

祈りの源である詩編

〔詩編についての第1回目の要理講話。水曜日の一般謁見にて。使徒的書簡「新千年期の初めに」34番で述べられたように、教皇様は詩編についての要理講話を始められる。〕

1 使徒的書簡「新千年期の初めに」で、神である主から新たに祈り方を習い、教会が「祈る術」という点できわだつように、という希望を示しました。

（32参照）祈る術を身に付ける努力は、とりわけ典礼に注がなければなりません。典礼は教会生命の源であり頂点です。それゆえ、神の民の祈りである時課の祈り（教会の祈り）を促すよう、更なる司牧的配慮が払われることが重要です。（同上34参照）司祭や聖職者に時課の祈りを唱えるという指示が与えられているのですから、信徒も同じ祈りを唱えるようにと熱心に勧めるのは当然なことです。これは尊敬すべき前教皇パウロ六世が目指したことでした。約30年前、文書「ラウデイス・カンティクム」で時課の祈りの現在の形が決定されました。時課の祈りの本質的構造である詩編と賛歌が、「神の民によって新たな感謝をもって」理解されるよう望んでのことです。（AAS63〔1971〕,532）

多くの信徒が、教区や教会組織の中で時課の祈りを正しく理解するようになっていくことに励まされます。とはいえ、この祈りを完全に理解するためには、要理や聖書の適切な形成が、依然として前提条件となります。

詩編解釈の鍵であるキリスト

今日は、時課の朝の祈りにある詩編と賛歌についての要理講話を始めます。この要理講話によって、皆さんが、キリストが使った同じ言葉で祈るよう励まされ促されることを望んでいます。キリストが使われた言葉は、何千年間もイスラエルと教会の祈りの主な部分でした。

2 詩編を理解するために様々な方法があるでしょう。初めにすべきなのは、文の構造、著者、形式、詩編が成り立っている状況を示すことです。その詩的な特徴を重視して読んでみるのも効果的でしょう。詩編は時に、最高の叙情詩的洞察力、象徴的表現に到達するものです。詩編を繰り返し読み、示される人間の心の様々な感情を考察することも同様に興味深いことです。喜び、感謝の意と感謝の言葉、愛、優しさ、熱心、また怒りやのろいにつながることもある激しい苦しみ、訴え、助けや正義への懇願です。詩編の中で、人間は完全に自己を発見するのです。

私たちが詩編を読むのは、詩編の宗教的意味に向かうことが特に目的となります。詩編は何世紀も前にヘブライ人のために書かれたものですが、キリストの弟子がそれをどのように祈りとして用いることができるかを見い出すことが目的なのです。そのためには聖書解釈の結果に頼ることになるでしょう

が、聖伝から学び、特に教会の教父たちに耳を傾けることにしましょう。

3 教父たちは深い霊的洞察力によって偉大な「鍵」を見分け確認することが出来ました。それは、詩編が、神秘の充満であるキリストご自身であると理解することです。教父たちは、詩編がキリストのことを語っていると強く確信していました。実際、復活したキリストは、詩編をご自身に当てはめ、弟子たちにこう言われます。「わたしについてモーセの律法と預言者の書と詩編に書いてある事柄は、必ずすべて実現する。」(ルカ24・44) 教父たちが付け加えることは、詩編がキリストについて語っていること、そしてお話しになるのもキリストご自身であるということです。そうすることで、教父たちは、キリストご自身だけではなく、全体としてのキリスト、つまり頭であるキリストとその構成員からなる全キリストについても考えているのです。

キリスト者はこうしてキリストの全神秘の光に包まれ、詩編の書を読むことができました。同じような見方は教会的側面にももたらされ、詩編が合唱される時、それは特に強調されます。このことから、神の民の祈りとして、初めの数世紀から詩編がどのように採用されてきたか理解することができるのです。ある時代に他の祈りが好まれる傾向があったものの、教会の頭上に詩編のたいまつをかかげたのは修道士たちの功績です。その一人はカマルドリ創業者聖ロムアルドです。伝記の著者ブルーノ・クエルフルトが記しているように、聖ロムアルドは二千年期が始まる時、詩編は本当に深い祈りを経験するための唯一の方法であると述べました。(Passio sanctorum Benedicti et Johannis ac sociorum eorundem: MPH VI, 1893, 427)

4 最初は極端に思えるこの断言とともに、聖ロムアルドは、初代キリスト教の最高の伝統をつなぎとめ、それによって詩編が教会の祈りの特にすぐれた書となりました。その行為は、信仰と交わりを絶えず脅かす異端的傾向を考慮した勝利の選択でした。このことに関して興味深いのは、聖アタナシウスがマルセリヌスに書いたすばらしい手紙です。それは4世紀の中ごろアリウス派がキリストの神性を激しく攻撃していた頃書かれました。宗教的感情を満足させる賛歌や祈りで人々を誘惑する異端と戦うために、教会の偉大な教父は、聖書に残された詩編を教えることに全精力を注ぎました。(PG27, 12ff参照) こうしてまもなく、いわゆる主の祈りに加えて、詩編を唱える祈りが信者の間で普遍的なものとなったのです。

祈りの理想的な源を保つ詩編

5 共同体として詩編を祈ることで、キリスト者の心が思い出し理解したことは、地上に住む兄弟姉妹との熱烈に一致した生活がなければ、天国におられる御父に向かうことはできないということです。さらに、ヘブライの伝統的な祈りに本気で没頭することによって、キリスト者は「神の偉大なみわざ」を繰り返しながら祈るようになりました。つまり、世界と人類の創造、イスラエルと教会の歴史において、神がなさったことを思いつつ祈るようになったのです。聖書から引き出されたこのような祈りの形は、個人的祈りを特徴付け、典礼の祈りを豊かにする自由な賛歌や修辭語句といった表現を排除するわけではありません。しかし、詩編の書はキリスト者の祈りの理想的な源を残し、新千年期の教会を鼓舞し続けることでしょう。

(2001.3.28)

信仰と希望

[一般謁見で行われた教皇様の要理講話。]

1 世界とその歴史を一瞥すると、戦争、暴力、抑圧、不正、道徳の腐敗に支配されているように見えます。黙示録第六章の光景のように、地上の不毛の土地を馬に乗って進んでいるものたちが、今は勝利の力の冠、暴力の剣、貧困と飢饉を起こす権威、死の鋭い鎌を身に付けているように思われます。(黙示録6・1~8参照)

聖霊は人間の心に希望の種を植える

歴史の悲劇やはびこる不道徳に直面すると、預言者エレミヤがした神への質問を繰り返し、抑圧されている多くの人々の苦しみを言葉に表したくなります。「正しいのは、主よ、あなたです。それでも、

わたしはあなたと争い、裁きについて論じたい。なぜ、神に逆らう者の道は栄え、欺く者は皆、安穩に過ごしているのですか。」(12・1) ネボ山の頂上から約束の地を見たモーセと違って(申命記34・1参照)、私たちは困難な世界を眺め、その中で神の国が前進しようと奮闘する光景を眺めています。

2 二世紀には、聖イレネオがこのことの原因を人間の自由の中に見い出しています。平和な調和をもった神の計画に従うのではなく(創世記2)、自分の意志で、神、人間、世界との交わりを絶った者です。こうして、リヨンの司教は次のように書き記しています。「それは神が行ったことではありません。神は罪をもった石からアブラハムの子孫を育てること

の出来るお方です。原因は、神に従わない者たち自らの不完全さなのです。当然、目の見えない人の失敗は光が原因ではありません。光が輝き続ける一方で、過ちを犯す間、盲目になった人々が暗闇に残されていたことが原因です。光は人々を無理矢理従わせたりはしません。神もまたご自分の業を誰にも押し付けることはないのです。」（「異端論駁」IV,39,3）

ですから、絶え間ない改心の努力が人間の道を進めるために必要とされます。自由に「神の業」、つまり平和と愛、真理と正義の計画に従うことを選ぶためです。この業はキリストにおいて完全に示されています。そして、改心したノラのパウリヌスは感動的なこの愛の計画を自分のものとししました。「私の唯一の業は信仰であり、音楽はキリストである。」（カルメンXX,3）

3 信仰と共に聖霊は人間の心に希望の種も植えます。というのも、ヘブライ人への手紙にあるように、信仰とは「望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認すること」（11・1）だからです。しばしば失望、悲観主義、死の選択、無力、見せかけによってと思える地平線に対して、キリスト者は信仰からわき出る希望に開かれていなければなりません。これは、福音書にある湖で起こった嵐の場面に描かれています。「『先生、先生、おぼれそうです』と言った。イエスは『あなたがたの信仰はどこにあるのか』と言われた。」（ルカ8・24～25）キリストと神の国を信じる信仰があれば、私たちは我を失うことはありません。そして平穏で静かな希望が、地平線に再び現れるのです。人間にふさわしい未来にとって、希望へ向かう積極的な信仰を再び活気づけることも必要です。このことについてフランスの詩人がこのように記しています。「希望とは良い種まき人を待望することです。天国への候補者を切望することです。希望とは無限の愛なのです。」（シャルル・ペギュ「第2の徳の神秘的な入り口」）

4 人間への愛、物的靈的幸福への愛、本物の進歩への愛が、信じる全ての人を揺り動かさなければなりません。より良い未来、もっと住みやすい場所、たとえ間接的でも神の国の建設に参加する、助け合いの社会を作るためにあらゆることをするべきです。神の国の光景の中にははっきりと、「人間――生きてい

る人間――は、教会へと続く第一の道、根源的な道を示すといえるのです。」（「生命の福音」2、「人間の贖い主」14参照）これこそキリストご自身が従われた道です。キリストはその道に従いながら同時にご自身を人間の「道」となさいました。（ヨハネ14・6参照）

二十世紀の涙によって新たな春が準備された

この道を歩むにあたって、まず初めに未来への不安を追い払うよう求められます。この不安はしばしば若い世代をとらえ、人生の要求に直面したときに無関心や拒絶で反応するよう促したり、麻薬、暴力、冷淡さといった自滅行為で反抗させたりします。私たちは子供誕生の喜びを示さなければなりません。（ヨハネ16・21参照）そうすれば子供は愛をもって迎えられ、体も心も成長するチャンスを与えられることでしょう。このようにして、まさにキリストの仕事に協力するのです。キリストはご自分の使命を「わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。」（ヨハネ10・10）と言いました。

5 今日の謁見の初めに、父と子、高齢者と若者に対する使徒ヨハネのメッセージを聞きました。これは、悪や悪魔は天国の父の強い存在によって打ち負かされるという確信をもって、共に戦い希望し続けるようにというメッセージです。希望を取り戻すことは、教会の根本的な仕事です。このことについて、第二バチカン公会議はつぎのような輝かしいコメントを残しています。「人類の未来は、生きる理由、希望を持つ理由を明日の世代に提供できる人々の手中にある、と当然考えることができる。」（「現代世界憲章」31）このような見方で、再度提案したいことは、1995年に国連組織に託した呼びかけです。「未来を恐れてはいけません。（・・・）私たちには知恵と徳という能力があります。この賜物、そして神の恩恵の助けによって、次の世紀・千年期には、人間の文明的な価値、また自由という真実の文化を建設することができるでしょう。私たちにはそれが出来るし、またしなければなりません。そうすれば、今世紀に流された涙を、靈魂の新たな春の地盤を準備するものにすることが出来るでしょう。」（「ヨハネ・パウロ2世の教え」XVIII・2 [1995] ,p.744）（2001.1.24）

「**教皇様の聲**」 ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙

■毎月10日発行 ■定価：送料とも一部186円 ■年内定期購読：送料とも一部2,087円（税込）

詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。

財団法人**精道教育促進協会** 〒659-0093兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL. 0797-34-5920

FAX. 0797-34-4920 振替口座：01130-8-72393 財団法人 精道教育促進協会

* 電話受付時間は月・火・金曜日午前9：30～11：30、水曜日午後2：00～午後5：00 となっています。